おんがく広場 第 29 号

令和 2 年(2020) 5 月 6 日(水)
発行・クッキー会　発行責任者・加藤良一
連絡先　rkato@max.hi-ho.ne.jp

先行きの見えないライブハウスの苦悩

加 藤 良 一

新型コロナウイルス感染拡大で、各地のライブハウスが苦境に陥っています。密閉・密集・密接の「3 密」にあたるとして営業自粛や休業要請を受けているライブハウスは、中小規模の個人経営も多く、札幌市のあるライブハウスは 5 月いっぱいで閉店を決めるなど、経営危機が拡大しています。

SAVE THE LIVEHOUSE

そんな厳しい状況をなんとか切り抜けようと、休業中の店のドリンクチケットを前払いで買ってもらう新たな取り組みが始まっています。ドリンクチケットをネット上で前払い購入して支援する「SAVE THE LIVEHOUSE」というプロジェクトが 4 月 8 日にスタートしています。

専用サイト上で店舗を選び、1 枚当たり 600 円の電子チケットを購入すると、営業再開後に店でドリンクの提供を受けられ、店には手数料 8%を引いた支援額が振り込まれます。開始から 1 週間ほどで 500 万円以上の支援が集まっているようです。現在、クラブや音楽バーなど 90 店舗が登録されているということです。

ジャズは静かに座って聴くものなのに…

ところで、ひと口にライブハウスといっても、ロックのように聴衆が飛び跳ねるものから、ジャズのように静かに座って鑑賞するものまでかなりの幅があります。それらを同列に扱うのはやはりちょっと違うなと思いますが、とりあえずは自粛要請で休業状態です。あわせて、そこに出演していたミュージシャンも仕事の場を失いました。多くはフリーランスの方々です。

ジャズシンガーの**中西雅世**さんが、5 月 5 日 facebook に投稿したメッセージはフリーランスの置かれた状況がよくわかるものです。ご本人の了承を得て以下に引用します。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

ごめんなさい、これ愚痴なので、程なく消してしまうかもしれません。でも、ちょっと言わせて。

SNS でこの状況の中、「クサる」とか「どこにも行けない」とか、いろいろおっしゃる方いるよね。気持ちはわかるんだけど、そういう人に限って今までと同じように収入があったり、形態は変わっても仕事量があったりするのよね。

ちょっと想像して。私達ミュージシャン。

この騒ぎのほぼ最初に「クラスター」が出たのが、「ライブハウス」。昨日の総理の会見でも「ライブハウス」って言葉が出て、ああ、これは私達の仕事が復活するのは最後だなって思った。

すべての「ライブハウス」が、スタンディングで飛び跳ねて、叫んで、っていう訳じゃないのにな（でも、そんな細かな認識を求めるのも無理なんだろな）。

ジャズクラブは、跳び跳ねても、叫んでもいない。もっとも、「歌う」ということが、飛沫感染のリスク大だとされているが。

だから、「密閉」された空間であるスタジオでレッスンもできない。なので、教える仕事も失った。全く仕事を失ったミュージシャンが、ほとんどだと思う。

明日の暮らしにも困ってるミュージシャンが、たくさんいると思う。その人達は、SNS で愚痴ることすらできないはず。その「切羽詰まってる状態」は、そんな次元じゃないから。私もほぼ収入ゼロ。

で、同じように大変な思いをされてる飲食業の人たちが頑張ってテイクアウトとかしてるけど、私達にはそんな術もない。音楽の出前は、できないもの。

この禍が収まるまで、じっと耐えるしかないのよ。

メンタルやられるミュージシャンも、出てくると思う。

でも、稼ぐ術はない。だけど、いつか今までのように、皆さまの前で演奏したい！歌いたい！

そういう気持ちを、ぎりぎりキープしながら頑張ってるんだよ。

死活問題なんだってば！

経済的にも、精神的にも！

だから、軽々しく「クサる」なんて言わないで。

悲しくて、羨ましくて、泣いてしまいそうだから。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

私の周囲にもたくさんの仕事を失ったフリーランスの音楽家の方々がおり、facebook 公開グループ＜ポストコロナの合唱活動を考えよう＞（管理者：千葉敏行氏）では合唱が中心ではありますが、様々な提案や議論がなされています。

かたや、同じ音楽の世界にいる者として、ジャズシンガーはじめライブハウスで演奏されているミュージシャンの苦悩にも思いを致す必要があります。